

## 会 議 報 告

### 計算機科学およびその応用（人工知能に力点を置いて）に関する地域シンポジウム

1月27日～29日 “Regional Symposium on Computer Science and its Applications (with Emphasis on AI)” が日本学術振興会 (JSPS) とタイ国科学技術会議 (NRCT) の主催によりタイの首都バンコクで開かれ、日本からは名古屋大学の福村晃夫教授をはじめとして総勢20名が参加した。シンポジウムが開かれた KMITL (King Mongkut's Institute of Technology, Ladkrabang) は、バンコクの郊外40kmばかりの所にあり、会場となった Hall は、日本からの援助で建てられたモダンな真新しい建物の中にあつた。

タイ国で計算機関連の国際シンポジウムが開催されるのは、これがはじめてとあって、開会式には王女をはじめ大学担当大臣ら政府高官も出席し、新聞・テレビがシンポジウムの様子を報じるなど、このシンポジウムに対する期待と歓迎振りがうかがわれた。

また、タイ各地の大学・企業・官庁から予想を上回り200名を超える参加があつた。シンポジウムの構成は次のとおりであつた。

#### 〔特別講演(各1件)〕

エキスパートシステム  
知識獲得  
物体認識  
自然言語処理

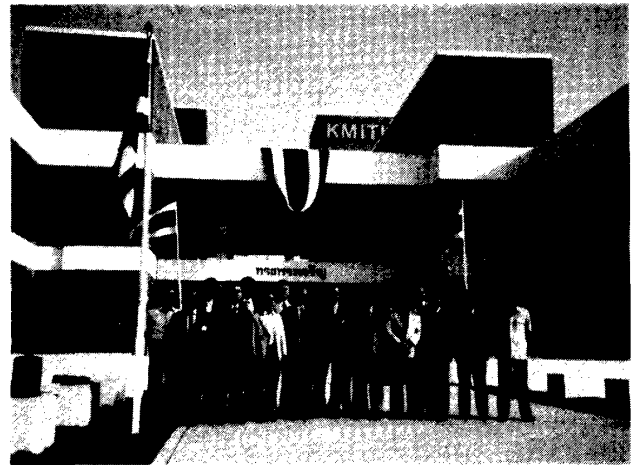
#### 〔一般講演(6分科会)〕

理論	6件
パターン認識	13件
エキスパートシステム	
	8件
ソフトウェア	6件
自然言語処理	7件
計算機応用	9件

一般講演は左記のとおり49件を数え、発表件数を国別にみると、主催国のタイと日本からはそれぞれ28, 15件と多数を占めたが、フィリピン(2件)、シンガポール(2件)、インドネシア(1件)、マレーシア(1件)などASEAN諸国からの発表があつた。

特別講演はもちろん、一般講演の中にも、推論・ソフトウェア・自然言語処理などにおける質の高い研究や、タイ文字のパターン認識、タイ語・英語間の自動翻訳システムに関する研究、地域開発計画など地域の独自性に富んだ研究・技術開発が発表され、われわれにとっても興味深いものであつた。

〔北橋 忠宏(大阪大学産業科学研究所教授)〕



会場の KMITL の建物

### TINLAP 3に出席して

TINLAP 3 (Theoretical Issues in Natural Language Processing 3) は1975年、78年に続く約10年ぶりの会議であつた。

AI研究が認知され、知識表現法が盛んに議論された75年、それまで大勢を占めてきた変形文法を否定

する新しい動きが現れつつあつた78年、そしてその後、AI研究のエンジニアリング指向の展開や、新しい文法理論のさまざまな展開があつたが、87年新春はタイミングの良い開催となつた。

ニューメキシコ大学のCRL (Computational Research Laboratory) で、1月7日～9日に開催された。プログラム委員長はCRLのY. Wilks所長であつた。参加者は、41名のパネラを含む170名ほどで